

2022年度 さぬき生活文化振興財団助成事業

アートde 書

町を探検！ ささやまもんで筆作り

報告書

兵庫教育大学ひょうごもんプロジェクト実行委員会

清水恵子氏のデモ作品





本事業の意義と目的

人間にとって普遍的な要素を本質として抱き、時代によって人々の生活や心に叶うように革新を繰り返し受け継がれてきたものが伝統文化ではないでしょうか。伝統文化は今に生きる文化であり、次なる変化を常に求められている存在と言えます。本活動の第一の目的はそうした伝統文化に宿った「普遍性」と「革新性」に触れ体験することで、伝統文化の本質を感じる機会を設けることにあります。そして第二の目的は新旧文化が混在する町を巡り、地域の素材を集めブリコラージュの手法で「道具（筆記具・筆）」を作り、実際にそれを用いて表現を行う活動により、今まで受け継がれてきた資源を受け取り、新たな創作＝「革新」に挑戦することです。

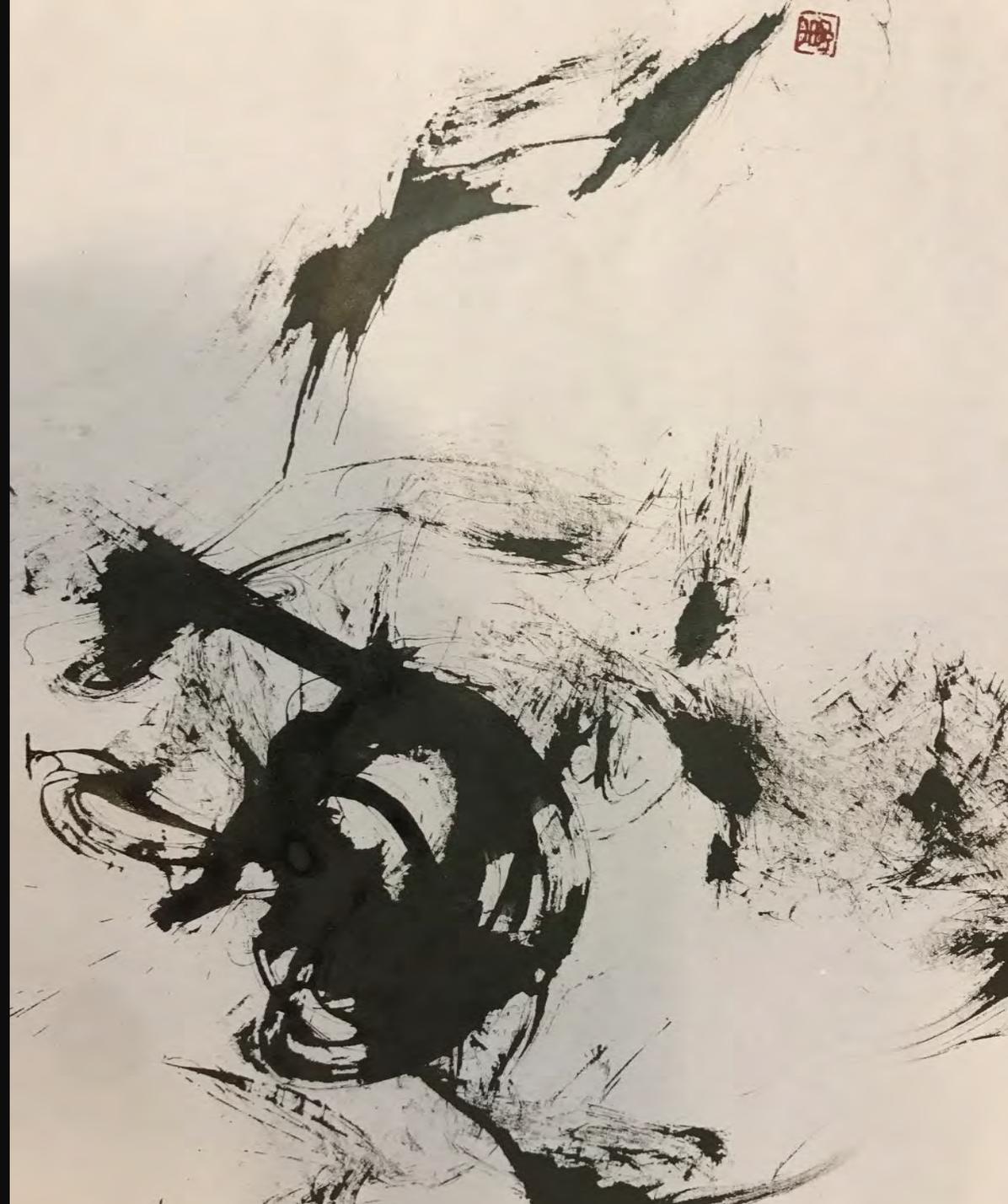
これらの内容から本事業が、閉塞感漂う現代の我が国の風潮の中で、参加者、活動の見学者、又活動後の展示に触れる鑑賞者にとって、伝統文化、人の可能性の大きさを予感させる出来事となることが期待出来ます。

事業開催の経緯

丹波篠山は京都府と大阪府に接する兵庫県の中東部に位置する旧城下町です。篠山は幕政の中核を担う譜代大名が代々治めたことから京の文化と江戸文化が融合した独自の豊かな文化が育まれました。

しかし全国的な人口減少と高齢化の流れの中、地方都市である丹波篠山には市内に年々空き家や空き店舗が目立つようになっていました。このような状況を打開する狙いもあり、2008年から国指定伝統的建造物保存地区である城下の河原町通を舞台に町屋を活用した現代美術の祭典「丹波篠山・まちなみアートフェスティバル」が開催されることになり、毎回多くの古建築ファンと現代美術愛好家等をはじめ多くの来場者を集めるようになりました。このイベントは今ではすっかり篠山の秋を代表する催しとなっています。現代アートを介して伝統文化が息づく町の魅力に多くの人が気づくことで、多くあった空き家の町屋は次々にギャラリーショップやカフェ、民泊に生まれ変わり町は活気を取りもどしつつあります。

このような伝統と現代が融合する町を舞台に新たな伝統文化、芸術の創出に挑戦しようというのがこの事業の開催を思い立った背景です。「書道」をモチーフに、書家と現代アートのアーティストの交流と作品鑑賞により参加者がアートを自分を表現する手段としてとらえ、自分の思いに叶った「線」を生み出す・見つけるために町をめぐる人々の活動の中から生み出される材を集め、オリジナルの筆（筆記具）を作る（ブリコラージュする）。参加者が自分の内面を見つめ、それを表現する活動を楽しみながら伝統文化の本質、現代アートとの類似点を体感することを通じ、今を生きる「人」として、この先のアートと新しい伝統文化について、その場集った人々と感じ、考える機会の創出出来ればと思いました。



町屋が美術館に変わる
Historic Street ART Festival
in Tamba Sasayama
2022

『町屋の芸術学校』

アート de 書

町を探険！ ささやまもんで筆作り

9月19日(月・祝) ①10:00~12:20 ②13:30~15:50

河原町で見つけて拾ったもので筆を作るよ。
「書」と「絵」の作家さんとの交流で作品からたくさんヒントを
もらって自分だけの面白い線を表現してみよう！

ゲストアーティスト

清水麻生 [絵]



東京芸術大学で学び、油彩を中心に具象画を描いています。



清水恵子 [書]



前衛の書家で、独創的な作品が海外でも高い評価を受けています。



募集人員 20名 幼児~高校生 親子で参加も歓迎です。参加費 500円

会場/下河原町集会场(河原町妻入商家群) 河原町交差点より東へ3分、観音寺の門前

作品発表会

完成した作品は、まちなみアートフェスティバルの会場で展示発表します。

9月23日(金)~25日(日) 会場: 銚山会館(河原町交差点角)

ファシリテーター

あさうみまゆみ(兵庫教育大学教授)、村上裕介(兵庫教育大学教授)

主催 兵庫教育大学ひょうごもんプロジェクト研究会

協力 丹波篠山・まちなみアートフェスティバル実行委員会

助成 一般財団法人さめき生活文化振興財団 生活文化振興助成事業

丹波篠山・まちなみアートフェスティバル 2022

□日 時: 2022年9月17日~19日・22日~25日(20・21休廊) 10:30~16:30

□会 場: 兵庫県丹波篠山市「河原町妻入商家群」<国重要伝統的建造物群保存地区>を中心に

主催・お問合せ 丹波篠山・まちなみアートフェスティバル実行委員会 TEL 079-552-2524 (丹波古陶館内)

sasayama-art.com [まちなみアート 検索](#)

お申込は裏面を御覧ください。

案内チラシ

町屋が美術館に変わる
Historic Street ART Festival 2022
in Tamba Sasayama

『町屋の芸術学校』

9月19日(月・祝) ①10:00~12:20 ②13:30~15:50

『アート de 書』 - 町を探険! ささやまもんで筆作り -

「線」

絵を描く人、書をする人、みんな「線」を大切に自分の表現を探してきました。
丹波篠山でアーティストたちの「線」に触れ、
自分だけの筆を使って、自由にあなたの線の表現を見つけてみませんか。
人々が大切にして受け継いできたものに新しいものを加え次の世代へ、
伝統や文化の一步、このワークショップのテーマ「線」です。

ワークショップ参加申込書

ふりがな	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女	ふりがな	保護者お名前 (年少のお子様参加の場合)
おなまえ	歳	おなまえ	
電話番号	()	お知らせFAX	()
お知らせMail	@		
ご住所	(〒 -)		
学校等	<input type="checkbox"/> 小学生以下 <input type="checkbox"/> 小学生 <input type="checkbox"/> 中学生 <input type="checkbox"/> 高校生 <input type="checkbox"/> その他		
グループ参加 本人除く	・家族(人)・友達(人)・その他(人)	参加 時間	<input type="checkbox"/> ①10:00から <input type="checkbox"/> ②13:30から

こちらで受付 FAX:079-552-5718 / sasayama-art.com

お問合せ/事務局 〒669-2325 兵庫県丹波篠山市河原町185 丹波古陶館内
電話 079-552-2524 MAIL: art-f@tanbakotoukan.jp
受付時間/10:30~16:00 休館/月曜日(祝日の場合は翌日)

ホームページより申込/QRコード▶



Webからのお申し込み
こちらのQRコードより
オフィシャルサイトの
募集ページへつながります



(活動の流れ)

- 始まりの挨拶、自己紹介、活動の流れの説明
- アーティストのお二人の普段使っている筆を観察。清水麻生氏の作品の鑑賞（鑑賞予定だった野外展示作品が台風のため撤去されていたため、代わりの作品を鑑賞）
- 町探検にスタート。筆作りの材料探しを行い、途中で清水恵子氏の作品の鑑賞を行う（王地山陶器所）
- 河原町通りの商店、製造所から出る廃材、アート作品の展示の際に出た部材、自然物などそれぞれが集めた素材の紹介
- 筆（筆記具）を作る
- アーティスト二人によるそれぞれの自作の筆によるデモンストレーション
- 表現1「自分だけの今日の風を表現しよう！」
- 表現2「自由に表現」
- 参加者、見学者と共に作品の鑑賞。感想等を発表。終わりの挨拶

- 出来た作品と筆記具、作者のコメントをアートフェスティバル期間中展示（鉾山会館）

















ワークショップに参加して

伝統文化を子どもたちに教える意義についてのお考えをお教え下さい。

- 伝統文化に意識的に関わっても関わってなくても子供の創造力はエネルギーに溢れています。有形無形に関わらず長い歴史の中で培われ美しく完成された文化に触れた感動は、子供達の核となって雪の結晶のように美しく大きく育っていくものだと思います。その小さな感動の機会はたくさんあるほうが良いので、子供たちに教える、一緒に体験することは有意義であり大いに楽しみなことです。

今回の活動に参加された感想をお聞かせ下さい。

- 描くための筆の材料を集める、そして作る、それを使って描く。やはり子供の創造力は予想を上回り、なんと魅力的な描画材料がたくさんできたことか。創造欲が湧くファシリテーターの誘導、自分で集めた材料、見たこともない書家のパフォーマンス等々刺激となって子供も大人も嬉々として制作に夢中になった時間だったと感じます。

- 分野の違う作家や研究者が子供たちと一緒に制作し、子供たちの創造力に感動の眼差しを向ける、または「すごいね」と声をかける。子どもにとっても大人にとっても素敵な時間でした。

清水麻生 [絵]



東京芸術大学で学び、油彩を中心に具象画を描いています。



講師・アーティスト

ワークショップに参加して

伝統文化を子どもたちに教える意義についてのお考えをお教え下さい。

- ・大いに賛成。興味ある方向に持っていくと子供達のアイデア、創造力にはすばらしいものがありますので、持っていく方次第だと思います。

今回の活動に参加された感想をお聞かせ下さい。

- ・自分の作った筆（用具）の使い方によりどんな材料をこのように使うとどんな線なるかゆっくりと見せ教えるべきでした。
- ・出来上がった作品の評をしてあげるとやる気もっと強く感じたのではないかと反省しています。

清水恵子〔書〕



前衛の書家で、独創的な作品が海外でも高い評価を受けています。



ワークショップに参加して

参加者の感想（要約）

- ・「書道」に対して思っていたイメージが変わった。
- ・町を探検して色々集めるのが楽しかった。
- ・筆が自分で作れることがびっくりした。
- ・思ったような線ができなかった。
- ・台風ぽい作品ができて満足した。
- ・墨汁が色々種類があることを初めて知った。キラキラの墨汁を使えて嬉しかった。
- ・今日の活動で昔と未来のちょうど間にいる気がした。
- ・もっといっぱい作品を作りたかった。
- ・うちわに線を書くのは楽しかった。
- ・「書道」はただ字を書くことじゃないことがわかった。



ワークショップに参加して

学生サポーターの感想



・ 伝統に対する見方が変わったり、多くのアーティストの作品を見ることが出来たりと、自分にとって大変有意義な体験となりました。兵庫県や篠山の文化や伝統についてもっと知りたいと思いましたし、自分の出身地の伝統にも興味が沸きました。伝統に対して、熟練した職人たちの作るものや技術という印象が強かったですが、継承する若手がいてこそ伝統であり、時代に合わせて変化していくものだと思います。

・ 始終ワクワク感のある活動で楽しかったです。書道も伝統文化と言えると思いますが、今回の活動では前半の河原町散策の際に伝統・文化が感じられたように個人的には思いました。私は何度も訪れている場所ですが初めて訪れる人や子どもたちにとってはある意味新鮮な空間なのではないかと思います。いつもと違う場所で材料を集め、地域の方々と触れ合い活動した今回の経験は子どもたちの中にやさしく残るように思います。

子どもたちに伝統文化を教える意義は先人たちの知恵から吸収できることが多くあること、又、その土地の風土を知り楽しめることだと思います。さらに伝統文化には「手仕事」が多くあり、デジタル化されている今の時代手仕事に触れることは大きな意義があると思います。

見学者・作品展鑑賞者の感想（要約）

- 子どもさんの方が案外自由に表現できるのから、現代的な書には合っているように思う。
- 元気がいい。勢いがあってとても面白い。
- 色々な筆が面白いと思います。「草木筆」というものを始めて知りました。
- こんな大きな紙で書道が出来て、きっと楽しかったでしょうね。
- 台風が来ていたからこんな風になったわけですね。
- 毎回面白いことをしてますね。篠山のアートフェスティバルならではのワークショップですね。



(活動の成果その1・起こったこと)

あらかじめ立ち寄り予定先（王地山陶器所、畳屋、クラフトギャラリー）にはこのイベントをすることを告知し、子どもたちへの筆づくりの材料への提供を依頼していたことから、材料集めは大変スムーズであった。子どもたちはこちらの想定外の筆作りのための素材（道端の彼岸花、庭先の柿、干してあるかぼちゃ、使えなくなったスポットライト）を見つけ出し、そのことがアーティストや学生サポーター主催者＝大人にとって大きな刺激となった。立ち寄り先でも、実際に子どもたちを前に素材や製品を説明いただく中で、当初提供予定であったもの以外・以上の素材の提供をいただいた（このことについては自分お仕事のことを話し聞いてもらう機会が嬉しいとの感想を伺った）。このワークショップが始終、このように一方通行の活動ではなく参加者、アーティスト、サポーター、ファシリテーター、町の住人と。双方向に影響を与えつつ成果や新しいものを目指す活動となったことは大きな成果だと言える。今回、講師の2名のアーティストには自身の普段使っている筆をお持ちいただき書道と洋画の用いる筆の違いをまずは観察できたこと、又2名のアーティストの作品を見学出来たこと、筆作りの材料集め、筆作り、作った筆を用いたデモンストレーションを行なっていただいたことにより、筆を用いての作品づくりへの参加者の気分が徐々に盛り上がっていった。又、今回講師をお願いしたアーティストにとってもこのような活動は初めてのことだったらしく、アーティストをはじめ周りの大人（サポーターや保護者）が楽しんでいる様子に子どもたちが大きく影響を受けた側面もある。さまざまに造形や色合いも工夫された筆が生まれた。当初の計画の段階から出来た筆を用いて西洋と東洋では表現の仕方が異なる目に見えない「風」を表現する予定であった。そのために画材に白うちわも用意した。当日は台風の接近を目前だったにもかかわらず穏やかな天候であったが、時折一陣の強い風や雲の早い動きも見られ、その気配は感じる事が出来た。そのため各自により表された「風」は微風ではなく、強めのリアルな風となった。



(活動の成果その2・見えてきたもの)

- 知っていることは当たり前で知らないことは新鮮である。知っていることは古いことで知らないことは新しいことである。で、あるならば、古くから伝わる伝統的なもの・ごとについてもある人にとって知らないことであれば新しく、例え最新の技術のものであっても深く親しんでいれば古いと言える。伝統＝古い等と既存の価値観で捉えるのではなく、個人のリアルな実感として、そのことを理解する必要がある。今回の活動で参加者、アーティスト、学生サポーター、見学者、ファシリテーターの意見感想を総括するとこのようなことが見えてくる。
- 「古い」と「新しい」の価値観で言えば、ここしばらくの間、生活に密着した部分においては新しいもの・ことに価値を見出す傾向にあったと言える。経済成長が頭打ちとなり、様々な領域において持続可能な開発の必要性が叫ばれようになった中、その傾向に変化が見られるようになってきた。しかし単に昔は良かったという懐古主義的な貴重な文化を保護するというスタンスだけで良いのだろうか。そのことははるか未来を夢想するのと同じくリアティーが欠如していることともいえる。奇しくも今回の活動で参加者からいただいた感想「昔と未来のちょうど間にいる気がした」がこの活動の成果を象徴している。大切なのは伝統と未来の狭間にある「今」、言い換えれば「今」が伝統と未来の狭間にあることを実感することであり、今回の活動は関わった大勢の者がそのことを実感できたことは大きな成果と言える。



(活動の成果その3・先にあるもの)

- 今回の活動は終始、様々な匂いを伴ったものとなった。まず集合時、集会場近辺は「金木犀」の香りが漂っていた。次に町探検の際、お寺の横を通った際、お彼岸前の墓地から線香の香りがした。王地山公園近辺では雨に濡れた土や落ち葉の匂いが辺り一面に立ち込めていた。続いて畳屋さんではイグサの香り、クラフトギャラリーではレザー作品の香り。集会場に帰って来た折は隣接する蕎麦屋さんからお昼の営業のためのおいしそうなお汁の匂いがした。筆を作る際は採集してきた草木や素材の色々な香りを楽しみ、そしていざ「書」をする段になり、墨液の容器の蓋を開けた瞬間、大人達は皆一斉に「懐かしい！」と声を上げた。大人にとって墨液の匂いは学校の教室を思い起こさせる、懐かしい匂いであることが再確認できた。様々な匂いを感じるたびに参加者同士伝え合い匂いの体験を共有することが出来た。五感の中でも嗅覚は原始的な感覚とされている。それゆえ触覚と共に、生まれてすぐの段階で獲得し、最後まで持ち続ける。考えてみれば芸術活動で視覚や聴覚は人工的なものによりバーチャルな体験が出来ても嗅覚までフォローされたものはあまりない。それだからこそ実体験として「匂い」はリアルなこととして立ち上がってくる。匂いの「地図」がつかれるかもしれない。あるいは目には見えない「匂い」を書で表すことにも次の機会には挑戦したい。

(活動の反省点)

書道をメインとする活動の場として、創作活動を行なった集会場の集会室が思った以上に手狭であった。そのため、ブルーシート等で養生をしていたが、墨液が飛び、掃除が大変だった。それ以上に参加者に気を使わせて活動させてしまったことは申し訳なかった。又、実際に書をする活動時間が足りなかった。今まで他の場所で実施した良く似た形の活動や、小学校の図工の教科書に掲載されている「おもしろ筆」の授業では「筆」を作ることがメインとなり、それを用いて活動は盛り上がり欠ける傾向にあった。その状態を打開するために、今回は講師であるアーティストの方のデモンストレーションからの刺激や画材をさまざまな種類用意した。その成果もあり参加者の作品を作りに対する熱意がこちらの想定以上に高くなった。反対に鑑賞会では多くの参加者が活動に満足し脱力しているような状況で多くの意見を聴取することができなかった。感想のためのシートを用意したが、全体的に参加者の年齢が低かったこともあり、記述しそれに応える雰囲気に至らなかった。参加者から感想の聴取方法には工夫が必要であると感じた。又、アーティストからの感想でもあったが、アーティストから評をしていただくことを失念していたことも反省点である。